

退院は悲劇の始まり（一九七五年）

戦後の経済復興とともに、長生きをされる人が急激に増えたためでしょうが、子供さんの看護法はみなさんよくご存じなのに、お年寄りが病気になられた時のお世話の仕方は、殆どの方がご存じない状況でした。

そこで、入院中から毎月一回患者家族会を行って、最新の老年医学と老人の介護法などについてお話をしてまいりましたが、それにもかかわらず、病状がよくなられ、日常生活がほぼ自立された段階で、退院をしていただいたのですが、退院後間もなく病状が悪化して再入院されたり、或いは、自宅で亡くなられたと言う悲しいお知らせを受けるような、苦い経験を度々味わって居りました。

当時、退院はまさに悲劇の始まりだったのです。

そこへ私にとって大変ショックとなる悲しい悲しい事件が起きました。

病状は良くならなれたのに、ひとり暮らしの上に身寄りもないために、退院がのびのびになっていたHさんに、福祉事務所の方が山本病院の近くのアパートを借りて下さり、そこから山本病院ヘリハビリに通うということになって、希望に燃えて退院されたのに、程なく、彼がアパートの自室で、死後数週間も経ってから発見されるという、非常に痛ましい出来事が起きました。

私達が死ぬ時には、愛する人の腕の中で、そして、家族や友人に囲まれて、あの世に旅立ってゆきたいものですが、彼は誰にも看取られることなく、ひとり淋しく亡くなられたのです。その切なく辛い悲しみを思うと、涙が溢れて止まりませんでした。

この事件は、一人暮らし老人を退院させることの難しさを充分に知りつくしていながら、的確な援助をしなかった私に、すべての責任があると厳しく反省しました。

そこで、私は在宅老人の健康を守るために、今後最大限の努力をするとともに、ご自宅での生活が難しいご老人の健康と幸せを、私が責任を持ってお守りしてゆくことを、Hさんのご霊前に固く誓いました。

そこで、特別養護老人ホームを私の手で作ることを決意したのです。

特養を建てるのに適した土地、自然環境が良くて緑も多く、而も、人里から離れていないという土地を探すために、豊橋じゅうを何回も走りまわり、やっと、牛川に理想的な土地を見つけましたので、早速購入しました。一九七五年四月のことでした。